Title	子どもの島：ルソーのイメージ（<児童>における「総合人間学」の試み研究：共同研究報告）
Author(s)	鈴木, 幸
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-3：13
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2660
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

共同研究報告

【<児童>における「総合人間学」の試み研究】子どもの島 —ルソーのイメージ—

2010年６月30日㈬、聖学院大学４号館第１会議室において、2010年度第２内児童学研究会が開催され、17名の参加者があった。聖学院大学児童学科助教の寺崎恵子氏が標記のテーマの下、特に『エミール　または教育ついて』を扱っての発表をされた。概要は以下の通りである。

子どもは弱く、目立たない端や余白に置かれるが、弱いからこそ人との関わりを誘発する存在であると考えられる。ルソーも人生における「子ども期」がいかに重要かを認識し、『エミール』において、教育を子どもの学習活動への助成的介入の行為と捉え、消極教育という思想を表わした。

教育とは、母と子、助成者の三者における産み・育てである。中でも一人の指導者の必要性をルソーは説き、その者が自然の指示に従って子どもを育てることが大切であるという。『エミール』では、語り手であるわたし（指導者）が、有脳で、父母の義務と権利をすべて受け継いだ者として、孤児であるエミールを指導する。その指導時期は生まれたときから一人前の人間になるまで（25歳ごろ）である。子どもはenfance（子ども）とadolescent（青年）に分かれ、その転換期である15歳ころ（第２の誕生）から、指導者の本格的な教育が始まる。そして指導者は子どもが大人になるまで付き添って育て上げ、子どもは大人との関わり、つまりeducationによって、包まれたものから開くものへと成長していく。

本学児童学科の寺崎恵子助教による発表が行われた。

読者である大人は、子ども期の状態を読むことで知ったと考えられるが、小説というよりも育児書として、当時の若い親たちに読まれたという。このことは育児法変革のきっかけともなり、また『エミール』の影響を受けて、子ども向けの作品や、現実社会を逆照射する島をモチーフにした作品が作られるようになり、子どもが登場人物として描かれるようにもなった。

子どもは人生の一角を占め、子どもとして生きることが保証されている。しかし弱い存在であり、「包」と「連れ添い」が必要であることから、指導者がその役割を担う。そして子どもが大人になることが、「包」としての教育が解除される時である。

発表後の質疑応答では、幸福の時期、「自然に帰れ」との関連、cornerの意味、子供を育てること、great motherとの関係等、活発な意見交換が行われた。今回の研究会は、子どもの捉え方、そして子どもと教育ということを確認する機会が与えられた貴重な研究会であった。

（文責：鈴木幸　聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）

（2010年６月30日、聖学院大学４号館第１会議室）